

<ミニ・シンポジウム>

総合討論 I

【岡田】

それでは、まず著者の山縣君から、この本を執筆するに当たっての自分の思いなり狙いなり、あるいは総論的な話を改めて話してもらい、その上で二人のコメンテーターからその話に対してリプライをお願いしたいと思います。

【山縣】

はい。ご報告・コメント、ありがとうございました。まずこの本を書いた狙い、どういう意図で書いたのかというのは、この本の後書きに一応まとめてあります。私が学部生の頃は、日本で産業空洞化が問題になり始めていた時期で、日本から海外へ企業が出て行き、日本経済、要は地域経済がどうなるかという時期でした。日本のことを研究してもよかったのですが、他の国、特にアメリカの中西部の自動車産業の空洞化問題が深刻になっていた地域の事を研究して、日本に何か有益な知見・アイデアを得られないかというのがそもそもの出発点でした。

ところが、その後の90年代の半ばくらいに、アメリカの空洞化問題というのは少し様相が違ってきて、それは単に衰退していくだけじゃなく産業再編、例えば新しいIT系の企業なんかが出来てきました。そういう新しい産業が出来てくるようなメカニズムを検討できれば、それはそれで、日本に有益なことが言えるんじゃないかと思って、新しい産業が出てくるメカニズムを都市ベースで見てきました。シアトルでは、ボーイング社がリストラを行って一路衰退かと思ったら、そうではなくて、新しいIT系の企業が出てきている。そういうことから、産業再編過程を企業単位で見られないかというところで始まった。始めはそういう軽い思い付きでやったということもあるのですが、先ほど富樫先生から、前半で企業都市論としてやろうとしているところと、後半である種のコミュニティが新しい産業作りに影響するというように、テーマが変わっているというご指摘がありました。実際にやっている中で、学問動向も変わったというのも

ありましたし、実際に自分が調べたことが、単純にボーイング社の企業都市であるという構図だけでは説明が出来ないですし、マイクロソフト社に単純に変わっていくという構図だけでも説明出来ないということに至りまして、現状に合わせてやっていることが変わっていった、ということになります。ただ、全体として、シアトルという都市の産業の移り変わりについては、企業ベースとそれから企業と地域経済との関係、地域産業連関の構造などを明らかにしようと考えてまとめた物になります。これが意図となります。

あと、裏の意図として、岡田先生と近い研究グループの方々に、こういう本を出された方もいらっしゃると思いますが、基本的には農業経済とか、歴史系、日本経済史の方々です。日本経済史の都市研究はありますが、産業都市研究などの分野ではまだまだまとまったものがないと思い、実験台としてやってみたということでした。

本日ご指摘を頂いた「企業の地理学」。ワシントン大学はその中心地として研究が進められています。地元にはボーイング社もあって、そこでワシントン大学のネットワークを生かして、企業内部データを採った研究などがあって、それを直接使わせて頂いています。また、今回、ボーイングやマイクロソフトなど、シアトルに関係するところしか検討できていない。航空宇宙産業は全米全体で巨額な軍事支出があって産業集積あるいは企業群があって、それとの関係で、シアトル、ボーイングが成り立っているところがある。もう少しそういう点も見て、評価すべきではないかというご意見があるかと思います。ある都市内部の分析をするのですが、それと企業が作っている外部ネットワークというか、全国的分散ネットワークあるいはグローバルな分散ネットワークを、もう少し視野を広げて、シアトルの評価を考えられるんじゃないかというご議論になるかと思います。この点についてはまだ十分消化しきれていない。課題としては認識しておりますので、今後やっていきたいと思っています。

現時点で一つだけお答えが出来るとしたらボーイングがなぜシアトルにいたのかということの説明。

やはりアメリカの航空宇宙産業でしたら、カルフォルニアのロサンゼルス南部が本拠地

の一つで、そちらが中心です。多数の企業が集積していて、そこに巨額の軍事支出もされている。それと違って、「たまたま」と言うと日本語が悪いかもしれませんが、20世紀の初め頃ウィリアム・ボーイングが飛行機ビジネスをやろうと考えて、木材があるということと、昔は布で作っていたので、布があつてお針子さんがいるということが大事だった。ということで、木材があつて、安くお針子さんが雇えるところを探していたら、シアトルはその条件に合うということで選ばれた。

そのあと、実はボーイング社は何回もロングビーチに移ろうとしています。それには二つの意図がありまして、一つは中心地に行ったほうが良いという判断の中で、ボーイング社はそういう風に言うことで、道路整備とか水道とか電気とか、シアトル市あるいはワシントン州に圧力をかけて、インフラを整備させる。後は税制。固定資産税をほとんどかけさせないとか、そのような形で非常に都合の良い社会条件を整備するために「移転の脅し」をして、条件整備しているということですね。ロングビーチに移ったら、色んな企業があつて、取引ネットワークも近いし、確かにそれはそれで良いのですが、人の取り合いが激しくなる。実は、ボーイング社は非常にウェットな企業で、割と良い家族経営的というか、アメリカの企業としては比較的社員が長く勤める企業です。そこで中心となるような労働力を取られなくなかった。だから、シアトルにいた方が良いという決断をした、ということのようです。ただ、その条件は21世紀に入ってから変わってきています。そもそも、もうすでに国際共同開発をして、グローバルな生産ネットワーク、例えば最新のB-787という飛行機については半分以上海外で作っている状況です。

もう一つ、実は民間航空機の最終組み立て工場をサウスカロライナ州に作っています。これは組合対策ですね。もともとウェットな家族経営でやってきたのですが、90年代に入ってから組合との関係でトラブルが多数出てきます。なぜなら、ボーイング社が海外でオフショアリングを先に進めようとしたので、それに対して組合がかなり怒りました。他方で、IT系の企業が出てきて、それらの企業の給料が良い。ボーイング社の給料が見劣りする。そこで、賃上げを要求する。生活コストも上

がってきていました。シアトル周辺がインフラ整備も進んでいるシワシントン州との関係で色々条件整備してきたから良いというものもあるんですけども、ボーイングの組合がかなり先鋭化してストライキを行ったりするので、ボーイング社が次の民間航空機の最終組み立て工場を他の所で作って、何か組合でやったら移すぞということで、完全に組合のコントロールに入ります。まあ、とにかく、労働力の確保を重視して、シアトルという決断をしてきたというのがあります。まあ、他方でなぜそれが可能なのかというのは、この本に書いているように、航空機部品が高級品だから、少々輸送費が掛かっても遠くから運んでもいいよ、ということが当然あったりします。

富樫先生がご指摘の、企業都市研究の潮流の中でこの本の積極的意義はなんですかというご指摘があつたのですが、これについてはもう少し考えさせてください。正直なところ、第2章でまとめたのですが、シアトルがボーイングの企業都市あるいは企業城下町なのか、そうじゃないのかということを考える時には、基本的には豊田や日立を念頭に置いて比べます。社会資本・公共サービス・地域資源などを独占利用したり、それを保障するための地元自治体との密接な関係といった日本流の一部の強烈な企業都市と比べたらまだ間接的な関係ではないか、という書き方をしています。ですが、もっと広い意味でみたら、なんらかの形でボーイングあるいはマイクロソフトの企業都市としての側面があるというのは間違いないところで、それについて、じゃあシアトルは結局企業都市なのか、そしてどういうタイプの企業都市なのか、ということについてはもうちょっと積極的に言わなければいけないと考えています。今回はそこが不十分だったというのが正直な答えです。

それから、富樫先生のハンドアウトの裏側。この辺り（「冷戦軍縮サイクル、民間航空機の市場競争」）は富樫先生のご指摘の通りで、航空宇宙産業自体はもの凄い変化が激しいところなので、そういう意味ではかなり特殊な産業都市であるといえます。ボーイング社のリストラ期に、シアトル経済の多角化・多様化が進んでいる面があります。一度60年代から70年代初頭に大不況がありまして、ボーイングがジャンボ機の開発において非常に苦しい

時期があって、倒産しかかった。その頃に、ボーイングも参加する形で、地元経済の多様化を進められないかというような協議会を地元経済会が集まってやっているんですね。同じようなことを実は 80 年代初頭もやっています。もう一回航空宇宙産業不況期があるんですけれども、その時には州政府がイニシアチブをとるという形で、はっきりと次はソフト産業でやっていくんだということを言って、実際ソフト産業の業界団体を作り育成して、それが 10 年後くらいに実を結んでいるということです。だが、それについて、やはり大企業に責任があるということで、そういう会議に加わって、戦略立案の時に関係していることは間違いない。

もう一つ、ボーイング社をリストラされた人たちがビジネスを立ち上げていきます。ボーイング社の社員はものすごくトレーニングをされていて、計画性もあるし、ビジネスのやり方も知っている。いろいろな専門知識も持っている。人材供給源となっているんですね。ただ、ソフト産業はそれとつながるか、直接的には言いづらいというのがあって、野口さんのご指摘につながります。

シリコンバレーが普遍的だ、典型だという議論があります。シリコンバレーが作ってきたネットワークの世界とマイクロソフトが作っている世界というのは別個のものとしてあって、それぞれをきちんと分析をして、その上で、マイクロソフトの特徴を明らかにしていくということをつけ加えて、シアトルはその拠点であるという形の説明が必要であったかと思います。ちょっとそこは弱いところですね。これは課題として承知していて、やろうと思っていたんですが、なかなか出来ていない。

後は日本との比較についても本格的にできていないので、また今後の課題かと思います。そして、富樫先生のプリントの最後に一番大きな問題を提起して頂きました。「競争的地域主義」ですね。コミュニティの教育・環境の改善とか、競争が全面的に出てきて、ある種その競争の場というのか、必要な条件を地域が備えていたらそこが選択されるという様な議論と、いやそうじゃなくて地域が、あるいはそこで生きている人々が暮らしていけるということをベースに発想していくのが大事なんじゃないか、という議論があります。そ

れをきちんと踏まえて我々が考えていく必要があるんですが、これについてはまた皆さんと一緒に議論させて頂きたい。私個人的には、これだけグローバル競争が激しくなっていてどこでも企業が行けるよと、あるいは、無限にイノベーションや知識が生み出されるよう繁栄するよ、というのはそれほど長続きしないのではないかという考えでして、ちゃんと人々が暮らせることをベースに発想するという風にしないといけないと思います。

野口先生の論点の「企業都市史における偶然と必然について」ということで、シリコンバレーが典型でシアトルが特殊だという整理を僕はしていなくて、シリコンバレー型のオープンネットワークは人材移動も含め台湾や中国、インドに展開していく。そういう形のところで、シアトルはやはりマイクロソフトを中心に、ちょっとクローズ、一部インドに行ったりもするんですが、そこはやはり区別して議論をする必要があります。

なぜマイクロソフトがシアトルなのかということですが、当初ビル・ゲイツとポール・アレンはハードの中心地に近いところということでニューメキシコ州のアルバカーキというところで OS の企業を作ろうとしていた。ただ当時、地元自治体の支援体制が整っていないということと、近所の住民からかなり怪しい企業だと思われて、例えば夜中にうるさいとか言われて、出て行かざるを得なかった。次はどこにするかといったら、ちょっと地元に戻ろうかというのが正直なところ。ただ、それも細かく検討したら、実はポール・アレンが、シアトル時代にワシントン大学の設備を利用したりしていて、そこでなんとかできるんじゃないかというのがあったようです。当時 70 年代の終わりくらい、コンピュータ施設があって、それを時間貸ししてくれたそうです。もう一つ、シリコンバレーと比べたらかなり小規模ですが、シアトルベンチャーグループなどのベンチャーキャピタルもある。だからソフト企業もそれなりにできるのではないかということが言われていました。マイクロソフトに関してもなぜシアトルかという問題があって、どこでも良かったっていうこともあります。ただソフト企業の場合、もしカリフォルニア州のシリコンバレーに行ったら、まずビジネスコストが凄く高い。住むところにお金がかかる。税金も高い。それに

比べたら、シアトルではビジネスコストが三分の二くらいですむ。それから、他の企業に人が流出する傾向が弱いそうです。シリコンバレーは絶対3年で人が移る。それに比べたら若干定着率が高いのではないかという説明を聞きました。

ただ、「偶然は偶然であると認めたほうがリアルな歴史叙述になる」と指摘されましたが、私もあまり必然だとは言っていないと思います。

【野口】

では、何を？

【山縣】

そうですね。ここはなかなか難しく、私が意識的にやったとしたら、まずソフト企業の事業構造がどうなっているのか、それが地域経済にどう影響をあたえているのか、ということについて、データをもとに明らかにする。それがそもそもサービス業に属する企業ですけれども、その事業のやりかた自体、それから地域経済との関係自体がシアトルのサービス経済化を一層促進するものであった。そういう点は限定的に明らかにしている。ちょっとここは慎重に言わせて頂きたい。ここはもっと積極的に言えというかなり厳しいご指摘を頂いているのですが、現時点の手持ちの材料では、完全にこうですとなかなか言えない。それについてお答えするためには、ICT企業のシステムの多様性のほうから深める必要があるかもしれませんが、これらをもうちょっと考えたいというのが正直なところです。

あとは、野口先生ご指摘の、「資本と都市の関係についての方法的整理」ですね。こちらについては、ソフト産業の段階になってくるとどれだけ良い技術者を獲得できるかというのが大事です。それを考える上で、先ほど富樫先生ご指摘のコミュニティの問題、都市の居住の環境とか、あるいは、どれだけ良い社会的な関係があるかという話にまで深めたら、多分そうなると思います。けれども、最近、社会資本とかソーシャルキャピタルなどと言われていますが、そういうところが非常に大事になってくる。それ自体を資本というのか、企業がどう作るのかあるいは作らないのかを深めて、もう少し現代的な資本主義的都市のあり方を積極的に提起する必要があるかなと

考えております。いずれにしても、一応自己評価では細かく知ることができたと思っています。産業の移り変わりを企業ベースで見ることができた。ただどういう企業都市なのか、ということですね。それから、シアトルがIT産業都市に発展しているのですけれども、IT産業のグローバルな展開とか、IT産業の様々な形態のなかでここはどういう意義があるのか、ここは説明が弱いというのが確かで、そこはもう少し直さないといけないところかなと思っています。

ただ、今回、皆さんもおわかりのように、色んな論点がある。一都市の産業の移り変わりを明らかにするのは複雑ですので、私は改善して、次また出してみたいと思っています。

【岡田】

はい、ありがとうございました。戦後の産業都市研究という話がありましたけれども、消えてしまった企業城下町というのは沢山あります。そのなかで、産業交代をしながら生きていく。しかも「成長の管理」都市という形で生活の質を追求しているということもあり、アメリカで随分評価が高い。そういう都市はどういう形で作られてきたのかということを追いかけてきたと言えます。

最初は私も技術連関から、ボーイング社から、情報・技術系の者が起業してくるのかなということで、そういうことをしょっちゅう山縣君と議論した記憶があるんですけども、どうもそうではない。むしろ、ボーイング社の給与体系が面白かった。地域の中でかなり高い水準でした。それが消費購買力を高めていって、小売業あるいはサービス業が広がっていく。ソフトウェア会社もボーイング関係でありましたし、マイクロソフト社が立地することによって、そういう人たちの生活の基盤が出来ていく。「C, V, M」で言うと、VとMの循環。Cのほうに関しては、ボーイングもマイクロソフトもかなりグローバルに調達しています。けれども、そこで再生産を繰り返している中心的な本社機能に関しては多くの労働者・サラリーマンとか技術者とかが集積している。そういう人たちが住みやすいような生活環境を作っていくということでシアトルという都市も作られている。産業都市研究から始まって、実はそういう方向に段々な

ってきている。本人自身は後半のところでは何をやっているかわからないと言っていましたけれど、私にとっては非常に面白かった。そういう形で結局「成長の管理」の担い手たちができている。今後どういう形で、この都市が発展していくかは分かりませんが、そういう現代アメリカの典型的な産業交代を上手に描いていて面白い作品でした。

それでは、ひとまず30分間、コメンテーターのコメントをふまえながら、自由討論をしたいと思います。

【名和】

私もなぜシアトルなのかが良く分からなくて、教えて頂きたい。まず、シアトルであることも当然あるが、それと同時に、マイクロソフトはアメリカの企業であって、なおかつアメリカの中に、需要があり、生産拠点もある、そういう企業ですね。その時に、アメリカが自国の中に企業を立地させるのであれば、何を考えているのかなと思って。やはり、生産性の高いものをしっかり残すということをやっていると、私は思っています。このマイクロソフトの情報産業を考える場合に生産性とは何かと考えると、頭脳労働なので、人件費にかけたコストに対してどれだけのリターンが返ってくるのかを考えるだろうと。そうになると、住み易さは重要であると。それとシリコンバレーがもう一つの集積拠点としてあると考えますと、シリコンバレーはやはり住みやすいですが、ちょっと高い。そうすると、アメリカの中で同じ人件費をかけるのなら、リターンが多い方が当然企業の立地条件としては重要です。マイクロソフトは情報産業の中でもかなり大量に人を雇用しますので、そういうことも考えているんじゃないかなと思いますが、いかがですか。

【山縣】

ボーイング社の場合は移転の脅しを使って、かなり自社に都合のいいようなインフラ整備をさせたり、税制を作ったりしたので、それなりに居心地のいい条件を作ったと言えます。ただマイクロソフトの場合は、マイクロソフトが積極的にインフラ整備をしたというよりも、ハイテク系の企業が来るからということで、周りの自治体やワシントン州が対応して、キャンパスの整備もするようにしているとい

うことで、マイクロソフト社が全面的に要求してやってというよりも、むしろそういうのがあるんだったら支援するという支援政策が一般的にあったということになる。それに続いて、人材について、ビル・ゲイツとポール・アレンとしたら、シアトルは住みやすい。夏が涼しいと。ただ問題があって、冬の夜が長いです。シリコンバレーと比べたらやはりちょっと落ちるんですよ。だけど、マイクロソフトからしたら、要するに人があまり流出しないだろうということだと思います。ボストンなどと比べると、わりと冬温暖で夏が涼しくてよいんだということになる。

【小山】

ボーイングからマイクロソフトへ、航空宇宙産業からソフトウェア産業へ移ったということですが、そのマイクロソフトへ移った当初の1970年代以降、飛行機にもソフトウェアが大分使われていて、ハイテクジェットなど中にはかなりのソフトウェアが積まれていると思いますが、そういう点からのIT産業の発展は、シアトルではあったんでしょうか。

【山縣】

航空宇宙関係の情報企業はそれなりに存在しているんですが、90年代あるいは2000年代にシアトルのIT系の産業のウェイトからしたら、これはごく一部で、大部分はやはりマイクロソフトに関係するような、パソコン関係の業態が非常に多いです。私も、航空宇宙産業自身がシステム設計とか、コンピュータを全面的に使うソフトを使うので、調べてみたんですが、やはり量的にみればごく一部だったようです。

【小山】

ということは基本的には内製ということですか。

【山縣】

いえ、一応外注しているんですが、他の地域に出したり、あるいは日本の企業からそういうシステムを買ったりするので、航空宇宙産業自体は情報化するんですが、地元に対する波及効果がシアトルにはそれほど及んでいない、そういう構図として一応考えています。

【岡田】

ヒアリング、現地調査を重ねながら、本当は立証しなかった仮説があったが、むしろ逆になったようです。航空機固有の技術に伴う情報、ICTなどと、マイクロソフトの情報技術とは全然違う手法であったことが検出できた点が大きな成果だと思います。

【富樫】

ビル・ゲイツやポール・アレンがシアトルにしたってというのはたまたまなんですね。ましてや、アップルに対抗してPC開発やディスクオペレーティングシステムをマイクロソフトが出したっていうのもたまたま。ただその後は知的所有権を囲い込んでいった。そしてマーケティングのうまさ。でもソフトウェアの開発は下手だから、あんないい加減なシステムになったんですね。内部のソフトウェアのプログラムはすごく大変だったんです。ストックオプションでかろうじてくい止めなかったらあんな無茶苦茶な開発なんかできなかったと思う。

【山縣】

今の件に対して申し上げると、情報産業は色んな発展の形があって、その中で、マイクロソフトのやり方が良かったかどうか、そういう議論は確かにあるだろうと思います。それとちょっと区別して、都市経済にとってどういうインパクトがあったかという観点から一応私は検討しているということです。

90年代は給料を押さえていて、一日20時間ソフトを開発して下さいと。朝6時に行って、夜3時位に帰る、そういう生活を強制する。それも突貫工事のソフトを作るために、一ヶ月くらいでこのモジュール作れとか、かなり強引にさせる。その見返りとして、ストックオプションですね。将来に株を売って、その値上がり分はあなたの物ですよということで、お金持ちを沢山作り、そういう形で人を集めていた。2000年代では様相はちょっと違って、官僚型の会社というか、かなり組織的に変えているのですね。それは大規模なサーバー向けのソフトの開発だとか、パソコンに関しては相当複雑な大ソフトの開発とかになっていき、ストックオプション制は廃止されて、年俸を大体平均10万ドルくらいまで上げる。2000年代に入ってそういうやり

方で、偶然的にプチ大金持ちを沢山作っていった。変わったやり方をとっていた所がもっと変わって、かなり高給で人を雇う形です。もう少し都市経済との関係で言うと、ある種、高い給料を払ってくれて、おそらく居続けるであろうし、オフショアリングも大々的にはしないであろうという企業になっていて、シアトルやワシントン州にとってはいい企業ということになります。

もう一つあって、この本でも最後に2000年代を調査して書いてあるのですが、実はマイクロソフトは2000年代に入って、その地位を確立した後に、地元にももの凄く貢献しているんです。バイオテクノロジー産業を作ったのもマイクロソフトです。国立の研究所を誘致して来たり、軍事予算が削られるので、その代わりに上議院議員が政治力を駆使してバイオテク産業を誘致してくる、ということで始まっているんです。

90年代の半ばから、ビル・ゲイツが個人的にバイオテクに沢山投資していて、シアトルは今グローバルヘルスの中心なんです。ビル&メリンダ・ゲイツ財団があって、そこは多額のお金を出していて、世界的なエイズ撲滅援助もしたりしているんですが、それに関連してシアトルとバイオテクノロジー産業との関係がかなりできてきている。それから、巨額なお金を出して地元のワシントン大学の情報工学部を整備したのはポール・アレンです。あとは地元の図書館を整備したり、美術館整備をしたりしています。マイクロソフトが巨額なお金を出してシアトルの居住条件をよくしたり、そういう波及効果が相当ある形になっています。

【野口】

技術独占については、直接産業に繋がる技術の独占を確保する条件としてのシアトルの必然性がマイクロソフトにあったのですか。

【山縣】

難しいのが、それをどう論証をして、学問の世界に認められるかということを考えて、関連情報を聞くようにしました。本では調べた結果を一応書いている、ということです。

【岡田】

なにを持って独占の指標にするかが問題で

すね。

【富樫】

市場を独占しているから膨大な利益を持っていて、それが今の投資力もしくは従業員の賃金のアップにつながったというのは確かにある。その基本はやはり市場独占ですね。それはIBMもすごく苦労した。IBM自体も、野洲もそうで立地が悪いけど、あんまり大都市に集中しようとはしないですね。

【名和】

独占にともなうメリットはシアトルのマイクロソフトやボーイングにはある。一方で、カリフォルニア、シリコンバレーでは独占ではないような形のメリットというのは当然あると。航空機だったらロサンゼルスで、独占ではない形の何らかのメリットはあるのではないかと思います。それは、作っている製品の性格ということのもあるのですか。

ロサンゼルスは航空機メーカーとして、多様な展開をしていて、シリコンバレーは情報産業として、多様な展開をしています。一方で、シアトルというのは大量生産して、シェアを握るような製品を、ボーイングにしろ、マイクロソフトにしろ、作っている。そのあたりでは、すみ分けの関係性があるのかと。やはりシリコンバレーというのは、かなりベンチャービジネスが出やすい。シアトルもそれなりに出やすいけれども、比べたらやはりシリコンバレーの方が上じゃないですか。

【山縣】

この点に関してはあまりいい加減なことが言えないんで、ちょっとこの点と企業都市の件はすみませんが、次の本で回答したいと思います。

【A】

今のマイクロソフト社はハードウェアなんですけど、ソフトウェアではアメリカからオフショアリングでインドなどに移して。マイクロソフトは、あるいはビル・ゲイツは、そういう戦略をとるのか、それとも、シアトルの地域を守るためにあえてそういう戦略には出ないのか、どうでしょうか。

【山縣】

やはりマイクロソフトはOS、もしくはパソコン中心としたOSの世界、オフィスソフトの一部を抑えてしまった、つまりとても立場の有利な独占的な企業です。だからこそできる振る舞いであると思います。IBMなどは、もうちょっとドライにしないと苦しいですね。

【三輪】

政策形成におけるインプリケーションをこのシアトルの事例から取り出すという観点から見たときに、シアトルの事例は日本にとって示唆にあふれる事例なんではないでしょうか。

【山縣】

限定的に言うとする、まずこの本はシアトルの産業再編というのか、産業の移り変わりについて、企業ベースで見て、そのメカニズムをまとめようとしたという本です。その上で、例えば、政策的な好条件はどういうふうに寄与したのか、あるいはそうじゃなかったとしても、この移り変わりのメカニズムに対してどういう政策を考えたほうが良いのかヒントを与えるということですが、似たような議論があって、シリコンバレーのメカニズムを明らかにして、それを移植すればシリコンバレーができるかどうかというのがあったでしょう。

私自身はあまり短絡に言いたくないのですが、独占的な巨大企業が非常に有利な立場にあるから、地元にお金を落として良い都市ができたよという、正直そういう面があります。それが真似できるかと言ったら、そんな真似のできる企業を持ってきたら良いんじゃないかということにしかならない。けれども、それだけではシアトルを説明することはできない。次に地元で小さい企業が出てきたりとか、巨大企業とは違う世界があったりする。それは何なのかと言ったら、2000年代に入ってシアトルがすごく住みよくて、地元でビジネスして暮らしたい、ということがある。そのために自分でビジネスを起こして頑張っている人がいて、その意味でシアトルはやはりそれなりに認知度もあったり、技術者もいたりするなど有利な条件ができていた、という面があるだろうと思います。コミュニティが住みよいという形で反映されるとか、そちらのところの世界があると、第6章でだいぶ言っています。

【三輪】

アメリカの中でシアトルは、地域的自治組織においてかなり先進的な地域だと聞きますが。

【山縣】

シアトル市が自治体や議会レベルで、労働力トレーニングプログラムをやったりしています。それが何らかの形で寄与しているのは間違いないと思います。シアトル市もやっているし、近隣の自治体もそれなりにやっています。特にシアトル市は地域作りにたいへん熱心で、労働力トレーニングもあるし、あとはトンネルバスを作ったり、都心に車が入り過ぎないように管理したりとか、色んな形で整備していますね。

ピュージェット湾地域に評議会があるんですが、都市計画で近隣の都市自治体と連携して取り組んでいます。そこでは、グローバル競争を考えて、ある種競争的地域主義の反映した形でコミュニティの質を高めています。下からの教育環境の改善などがどれだけコミュニティづくりに寄与しているのか、寄与していないのか、今後やっていきたいと考えています。

【三輪】

競争的資金というと、マッチングファンドのように、より良いプランを立てているところに優先的に資金を割り合てるというのがありますね。成長の管理をしている所が低所得者に対しても住宅供給することを都市政策の中で行っていくというのは、下の方に厚い都市政策として、アメリカの中で一番進んでいるということで、そうした意味でもシアトルはアメリカの中では先進的な事例ではないでしょうか。

【山縣】

トップとは断言できませんが、10本指には入ります。

【三輪】

それで、アメリカでシアトルのような都市が出て、アメリカの都市政策とか、アメリカ一国においてはどんな意味があるのでしょうか。

【山縣】

その点はちょっと研究を深めて 30 年後に回答ということではよろしいですかね。取り組む価値のある仕事と考えます。

【A】

アメリカのプロパティ・タックスについて、結局箱モノのハードからソフトに移ってきたときに、税収がどうなるのかと。教育とか福祉とか、プロパティ・タックスを基本にやっていくわけです。箱モノがいっぱいできてなかったら税収がなかなかとれない。おそらくシアトルにシリコンバレーの人たちが行ったのも、地価が上がりすぎて、IT企業の人たちが給料をもらっても生活に豊かさ出てこない。だったら、別の地域があったら、自分のもと豊かになるんじゃないかなと思って、見つけ出した地かもしれないですね。ニューヨークとか、東京以上に地価が高いという状況の中で、生活が豊かにならない。このプロパティ・タックスに関する視点というのは何かありますか。

【山縣】

実は岡田先生から、企業の自治体への納税の点を分析していないと指摘されましたが、本書では弱い点です。地方財政論的な観点を補強する必要があります。シアトルは、プロパティ・タックスの場合は、割と伝統的な産業から、というのがあるんです。ビルを持っているとか工場を持っているとか、そういう企業から取ってくる。ただ、もう一方で、ワシントン州とか、ワシントン州の自治体の特徴は、セールス・タックスをかなり集めている。新しくハイテク系の給料の高い人が来たら、それでペイする、集めるという図にどうもなっているらしい。

【難波】

税に対するインセンティブがなにかというと、州税です。プロパティ・タックスというカウンティとかシティーとか、そちらの方の意識が高いので、州税だけで話してしまうと、セールス・タックスの話になってしまう。地方財政がちょっと抜けていますね。

【山縣】

そうですね、かなり裕福な人達が来て、家を買って、高級住宅地を造ってもらったら、当然それはそれでいいというのがある。

【 B 】

移民についてですが、40 年代、シアトルの方にアフリカ・アメリカンの人口が増えたというのを最近研究していて知ったのですが、ボーイング社は黒人や日本人移民の雇用に関わっていますか。

【 山 縣 】

ちょっと弱い分野ですね。シアトル自体は日系移民とか、スカンジナビア半島から移民が来た所です。最近はアジア系の移民が非常に多いという特徴があります。1940 年代ですね、あるとしたら、戦時経済のブームで労働力不足があって、黒人の人達がやって来たのは考えられると思いますが、ボーイング社で黒人の人が働いていたかどうかは、ちょっと確たるお返事ができません。

IT系の業界では、シリコンバレーの場合はインド人が来ているとか、あるいはロシア人が来ていますが、シアトルの場合は若干違うのではないかと聞きました。マイクロソフトは当然インド人も来ていますが、ロシアではなくて東欧や中国、あるいは日本から行っている。ロシア人はシリコンバレーに行ってしまうから、それ以外の日本や中国、東欧からの移民が来ているのかと思います。

【 岡 田 】

まだまだ議論したいかもしれませんが、総合討論のときにもう一回シアトル論に戻り、日米研究の比較ができるかと思いますので、ひとまず、ここで議論を中断したいと思います。

【 山 縣 】

どうもありがとうございました。